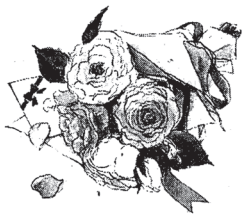
たまてばこ



闘病支える息子の絵本

「ごりっ」。2008年春、大分市の皮膚科医、中澤有里さん(38)は左胸に親指ほどの小石があるような感触に襲われた。医師の中澤さんはすぐに病名が浮かんだ。乳がんは既に進行していた。

ショックだった。だが、医師である自分が逃げるわけにはいかない。がんとの闘いを決意し、左胸を全摘出。再発防止のため抗がん剤と放射線治療を受ける生活が始まった。

長男柊斗（しゅうと）君(11)は当時小学1年生。病気のことをどう伝えていいか分からなかった。胸の手術痕を見せれば、女性に対するトラウマになるのではと心配し、柊斗君との入浴時には下着を着けた。

治療開始から約2週間。夜、自宅で髪がごっそりと抜け落ちた。同居の母親をそっと呼び、胸の中で声を押し殺して泣いた。娘として母に支えを求めながらも「息子にこんな姿は見せられない」という母としての思いは忘れなかった。

病気のことははっきり伝えなかったが、柊斗君は母親の異変を感じ取っていた。抗がん剤治療で入院した時には冗談を言って笑わせ、背中をさすり、手を握った。不安で泣きたいだろうに、明るく振る舞う姿がけなげで、いじらしかった。そして中澤さんには「ママ、がんなんかに負けないで」と、柊斗君が応援しているように思えた。

中澤さんの体調が落ち着いた昨年、絵画教室に通う柊斗君が一冊の絵本を書いた。題は「人と絆」。

＜ぼくが6才の時に、ママは、乳ガンって病気になった＞＜病気のえいきょうで、ママはかみが抜けたり、赤ちゃんがうめなくなったりした。ママが病気になった時、ママは、ぼくの事を考えて病気にたちむかったんだって・・・＞

ページをめくりながら涙がこぼれた。あの時、柊斗君にどれほど勇気づけられたことか。絵本にはがんと闘う母親への思いが詰まっていた。中澤さんは、これに自身の講演録を合わせて出版した。母と子が作ったわずか17ページの絵本だが、支え合うことがどれだけ患者を勇気づけるか、その証しと思っている。

【佐野格】